

雪印の優良牧草品種を活用して 草地更新をしましょう

弊社はこれまでの報告の中で、経年化した草地はシバムギなどの地下茎型イネ科雑草が優占するケースが多くみられ、これらの草種はカリ含量が高く、WSC(可溶性炭水化物：光合成により生産された糖類の総称)含量が低い傾向にあること、さらに草地にスラリーを多投することで、これらが更に助長され、サイレージ不良発酵の原因となっていることを明らかにしてきました。いくら優れたサイレージ調整技術があっても、原料草が悪いとサイレージの品質にも限界があります。弊社の優良牧草品種を活用して草地を更新し、高品質のサイレージを作りませんか？

1. 草地更新のポイントは除草剤

草地更新の方法には完全更新と簡易更新の2種類があります。それらは下記の様に作業工程が異なり、完全更新に比べ、簡易更新は作業が簡略化され、迅速・低コストでの更新が可能となります。

【完全更新】

除草剤散布→堆肥散布→耕起→土改剤散布
→整地→鎮圧→施肥・播種→鎮圧

【簡易更新（作溝法の場合）】

除草剤散布→土改剤散布→施肥・播種

ただし作溝法による簡易更新はルートマットの厚い草地では早魃害を受けやすく、土壤改良の効果も低いという短所もあります。

写真1は完全更新において、耕起前に除草剤を処理した区と無処理区との比較です。夏播種当年の10月下旬の状況で、無処理区は既にシバムギが条状に再生してきているのが確認できます。この圃場を追跡調査したところ、**図1**に示すように利用3年目の除草剤無処理区は更新前と同じシバムギ優占草地となりました。このように地下茎型イネ科雑草が繁茂した草地を更新する場合は、いずれの工法でもグリホサート系除草剤の散布が必要となります。なお、除草剤は、草地に対して農薬登録が認められているものをご使用ください。

除草剤の散布時期は、1番草収穫後または2番草収

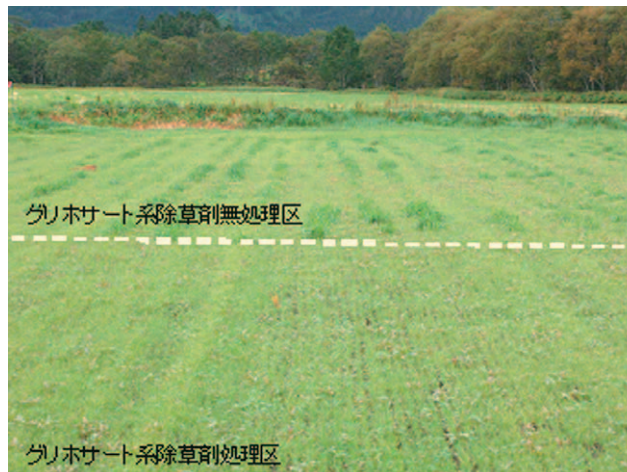


写真1 耕起前に除草剤を処理した区(下)と無処理区(上)

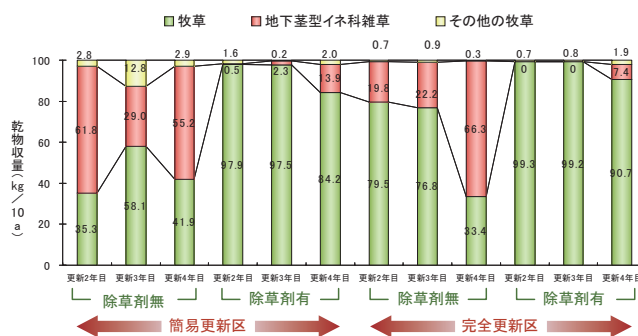


図1 更新方法+除草剤有無の違いによる植生割合の推移（'05～'08年、北海道研究農場）

穫後に、地下茎型イネ科雑草が30cm以上再生した頃が適切です。再生草が短い時期に散布すると、雑草が完全に枯死せず、再び繁茂してしまう可能性が高いです。また、散布量はラウンドアップマックスロードの場合500ml/10aが適当です。散布ムラや薬量が少ない場合でも、地下茎型イネ科雑草は完全に枯死せず再生してきます。

2. 播種作業は適期に実施

牧草の播種適期は融雪直後（4月下旬～5月下旬）の春播きと8月中～下旬の夏播きの2回ありますが、近年は夏播きによる草地更新が多く見られるようになりました。この時期は土壌水分が比較的豊富で、雑草との競合が少ないことから、良好な草地を作ることができます。作溝法による簡易更新を実施する場合は、

土壌水分がより豊富なことから、8月下旬頃に播種することが望ましいでしょう。またその際の除草剤処理との同日播種は避け、再生草が完全に枯死した後にを行うのが良いでしょう。最低でも除草剤散布後10日以上枯殺期間をとる必要があります。散布後の枯れ草は、播種機で溝を切る際の妨げとなります。枯れ草が多い場合は刈り取りを行い草地から搬出するか、1ヶ月前後の期間を空け十分腐熟させてから播種します。

一般に、夏播きする場合の原則として、8月下旬までに播種を行うべきであると言われていますが、9月中旬以降に牧草を播種するケースも見受けられます。その年の気候によっては、9月中旬以降に播種をした場合でも牧草が十分に定着することも有り得ますが、気候の年次変動などのリスクを考えると、やはり8月中の播種をお勧めします。



写真2 8月下旬播種の翌春の状態



写真3 9月下旬播種の翌春の状態

写真2は2009年8月下旬、写真3は同年9月下旬に播種したチモシーとアルファルファの混播試験圃場(長沼)を2010年5月12日に撮影したものです。

本年は9月下旬播種でも、チモシー、アルファルファともに越冬した個体はあるものの、密度が低く、草丈に10cm以上の差が認められました。

やむを得ず9月に入ってから播種となる場合、定着する個体数が少なくなることを考慮し、通常の2割増し程度の播種量をお勧めします。また、播種する牧草は、チモシーでは初期生育の優れる早生品種を選定すると、冬枯れの可能性を軽減できます。

3. 優良品種で草地改善

〈チモシー早生品種〉『ホライズン』

ホライズンは道内の収穫最盛期(6月中～下旬)に出穂期～出穂揃期を迎える早生品種です。特徴の1つは耐倒伏性が優れる点です。倒伏すると牧草が乾きにくくなり、高水分となるため、サイレージの発酵品質の低下を招きかねません。2つ目の特徴は2番草の出穂茎が多く、再生力が優れる点です。この特性により、1番草だけでなく2番草也多収となります。さらに、アルファルファやアカクロバなどマメ科牧草との競合にも強くなるためにホライズンは混播適性に優れた品種です。

〈アルファルファ〉『ケレス』

ケレスは永続性が優れます。その根拠の1つ目として、越冬性・耐凍性が優れる点が挙げられます。ケレスは長沼町と十勝の芽室町において育成されました。越冬条件の異なる2試験地で育成したことにより、雪腐病が多く発生する多雪地域、土壤凍結が生じる少雪地域のいずれの地域にも適応した品種を開発することができました。2つ目はそばかす病抵抗性が優れる点です。そばかす病は夏～秋にかけて多く発生する病気で、その時期は越冬のための貯蔵養分を蓄える時期に重なります。罹病すると、光合成能力が低下し越冬のための養分を十分に蓄えることができず、株の枯死へとつながります。

また、アルファルファはギシギシ用の除草剤「ハーモニー」を散布しても薬害が少ないため、アカクロバの代わりに混播される方が増えております。

その他にも倒伏に強いチモシー中生品種『ホクエイ』、採草・放牧兼用の晩生品種『シリウス』、越冬性が優れるオーチャードグラス『バックス』など、弊社育成の北海道優良品種を多数取り扱っております。優良品種で草地を更新し、良質なサイレージを作りましょう。

(北研 横山)